

変身の誘惑

ポール・ボウルズにおける変身のセクシャリティ
テキストのミクロロギー（１）

田 代 真

はじめに

本稿は、アメリカの小説家ポール・ボウルズ（1910 - 1999）の作品研究の一部をなすものである。ボウルズのテキストに接するとき、「変身」というモチーフは、特に強く印象に残るものの一つである。その重要性は、彼の作品を貫く明示的といってよい主題が、自己同一性の喪失であることを考えれば、理解しやすい。本研究もこのモチーフを手がかりに着手された。ところが、この「変身」というモチーフを扱うにあたっては、このモチーフがいわばそのモチーフ自体の「変身」によって読み手を誘惑する、という困難が存在する。先に述べた作品の読後に持つ印象の強さは、明示的なモチーフそのものによってのみ惹起されたのではない。それは、むしろ読みの過程で、そのモチーフが、通常「伝記的事実」とか「歴史的現実」と呼ばれるイデオロギー（これは言語によって構成されながらそのこと自体が意識されないのだが）や先行する文学テキストなどを含む、サブテキスト⁽¹⁾から選択され他のモチーフとともに組織されるその仕方によって規定された複合的な産物に他ならない。勿論、モチーフが選択されるに当たって、この過程自体が意識無意識を問わず作動するのであれば、読者は「変身」というモチーフそのものの特質を語りなどの他のレベルに転位させそこでモチーフを変身＝変形するという誘惑に抗することはできないし、その必要もない。

しかし、本研究の意図するところは、テキストの分析を通じてこうした読みの過程で作動する仕組みを明らかにすることにある。「変身」の概念をいたずらに拡大し、モチーフとその組織化を混同することは、手順の観点からも、記述の経済性の面からも問題が多い。そこで本研究では、対象を明示的であり数も少ない動物変身譚に限定し、そこで得られた研究成果に基づいて、他作品の分析に移っていくという手順で進めていくことにする。

すでに、拙稿「猫と固有名詞 ポール・ボウルズ『キティ』」（田代228 - 239）では、子猫に変身する少女の物“Kitty”を扱った。当初本稿では前稿と対を成すものとして少年が蛇に変身する「アラール」“Alall”という物語を対象とする予定であったが、前稿から若干時間経過し、その間に作家も鬼籍に入り、筆者の研究の方向性もいくらか変化しつつある。そこで手順としては、まず、研究の進行状況に即し、「キティ」についても前稿で触れることができなかった点を補足しながら振り返ることによって方法論的な問題意識を整理し、ついでそれと比較

六〇

しながら「アラール」における問題点を析出しこの誘惑的な物語が読みの過程でどのような謎を孕むかを明らかにする。最後にその謎の解明作業への導入としてこの短編の冒頭部分を精査することにする。こうした前提に基づいて、続稿では謎の解明作業そのものが展開されることになるはずである。なお行論の性格上、前稿との重複が避けがたいこと、およびその重複箇所をいちいち挙げる煩を省いたことについてはあらかじめ諸氏の御寛恕を請う次第である。

伝記的事実の誘惑

作者の伝記的事実というものは、先に述べたとおり、サブテキストの一つといえるだろう。作者の実人生をめぐるさまざまな言説は、彼自身が意図するしないにかかわらず産みだされる伝説や噂、研究者や伝記作者の調査などによって織り成されて産まれた「事実」なるものに対して、多くの場合は作家の作品の物語（の解釈）を意識無意識を問わず投影して生産され、文学作品を読むに当たって多かれ少なかれ読者の読みに暗黙の方向性を与える。これを完全に排除することは不可能であろう。とりわけ、ジャーナリズムの発達した二十世紀の文学者にとって、すでに自己のイメージの形成そのものが創作の動機をなしている場合が多いだけになおさらである。本研究でも、のちにこのような言説がテキストの読みに与えるさまざまな力を検証してみたいと考えている。当然、本稿の読みがどのような力の交錯の産物であるか、他のサブテキストとの偏差によって計測される必要があるだろうからである。

詳細な検討はその際に譲るが、前稿で述べたように、晩年は再評価の榮譽に恵まれたボウルズの人生も伝説と韜晦に包まれている。音楽家にして詩人でもあるこの小説家の生涯は、英米モダニズム文学の母とも呼ぶべきガートルード・スタインから若き日にフランスで受けた薫陶、長きにわたる海外生活とモロッコへの定住、同性愛、やはり同性愛者である小説家ジェーンとの奇妙な結婚生活、アレクサンダー・ギンズバーグやウィリアム・バロウズらビートニク作家たちとの交流、麻薬常習などの伝説に彩られ、それだけでも極めて誘惑的なものである。同時代の綺羅星のごとき文化人たちとの交流を描いた自伝（『止まることなく』）が存在するにもかかわらず、そこから彼の内面が窺われることは意外なほど少ない。じっさい、彼の自伝と虚構の関係に着目したマリリン・モースは、この自伝がボウルズ作品の愛好者たちにも不人気な作品とみなされていると指摘し、その原因としてルポルタージュ風の文体と「著者ボウルズの内省に対する強い嫌悪感」（モース295）をあげている。彼女は、「ボウルズのこうした内省に対する嫌悪感から生じた美学上の戦略を突き止め」ようと試みている。さらに、

その戦略は自叙伝作家ボウルズの虚構を創作する衝動と強く結びついている。ボウルズにとって「虚構」とは自己韜晦の手段にほかならず、読者と正面きって出会わないための方策に過ぎない（モース296）。

と述べているが、このことは、自伝における「虚構」のみならず、彼の虚構の小説についても、そこに窺われる屈折したコミュニケーション願望を知るものにとっては首肯できるところである。

また、生前に公刊されたクリストファー・ソウヤー＝ロカノの大部の伝記『見えない観客』について作家は「その内容に立腹し、日本人翻訳者の下に、一言といえどもあの書物に記されていることを信用してはならない、と書き送」ってき たという（四方田355）。

本研究は作家の伝記研究をねらっているわけではないが、小説テキストの「虚構」の分析を通じて、テキストの記号的な戦略を析出することを目的としており、その成果に基づき、その後の段階で、モースと違う観点からではあるが、彼の自伝をも含めた「伝記的事実」なるイデオロギー、さらにはそれを生み出す「政治的無意識」（F.ジェイムスン）を探ることになるだろう。

テキストのミクロロギー

「自己韜晦」に満ち「読者と正面きった」「出会い」を拒むテキスト。では、このようなテキストに対してどのような問題意識を持って取り組んだらよいのか。それには、いささか論点を先取ることにはなるが、ボウルズに先行するモダニズムの文学的企てとの関連で、もう少し詳しくボウルズの短編テキストの特質を述べておく必要があるだろう。

文学史の常識に属することだが、英米文学におけるモダニズムの企ては、1920年代に開花する。すでにあげたガートルード・スタイン（1874 - 1946）、ジェイムス・ジョイス（1882 - 1941）、T.S.エリオット（1888 - 1965）、エズラ・パウンド（1885 - 1973）、ヴァージニア・ウルフ（1882 - 1941）や、後続のアーネスト・ヘミングウェイ（1899 - 1961）やウィリアム・フォークナー（1897 - 1962）らスタインの命名にかかるロスト・ジェネレーションの作家たちは、美術など他の芸術領域をも含む広範な運動の一環として、言語表現の大胆な実験を推し進めた。それは、一方ではフロイトの無意識の発見にみられる人間の非合理的な部分に対する認識を背景に、他方では第一次世界大戦による西欧の没落の不安や従来 of 文化的価値の崩壊を背景に展開された。時としてそれは、写実性といった言語の表象作用や物語性といった従来の文学の表現システムを破壊するところまで推し進められることになった。この傾向はそれ以降の文学のあり方を大きく規定する企てであった。

しかし素朴に表象を解体しうると信じることできたモダニズムの審美性追求の実験も、第二次大戦における全体主義という圧倒的な表象の暴力によって引き起こされた荒廃の前にして変質せざるを得なかった。よく知られるように、いわゆる戦後の実存主義は世界と主体の陥ったニヒリズム＝価値の低減化という問題と取り組んだ。第二次大戦後、『シェルタリング・スカイ』で登場したボウルズは、そのような実存主義との親近性を持った作家と捉えられることが多かった

(彼はJ.P.サルトルの劇作『出口なし』の英訳者でもある)。たしかに、一種世界憎悪まで感じさせる徹底したニヒリズムにそうした親近性を窺われるが、必ずしもその枠内に閉じ込めることができない複雑さを持っている。

ボウルズは実存主義の作家たちのようにニヒリズム＝価値の低減化を大問題として「問題化」するのではなく、むしろ「問題化」され得ない些細なもの、周辺のなもの、違和感を引き起こすものに「固執」する。モダニズムは、文学言語の純粹化を目指し言語実験を推し進めた結果、言語から意味を剥奪しその物質性を追求する傾向　詩的言語へ向かう志向性を持つ。そのため、小説のように物語や描写が重要な役割を果たすジャンルにおいても表象レベルでのリアリティが解体される傾向が強かったのだが、ボウルズにおいては、現実との微細な違和感をはらみつつも写実性や物語性はある程度維持されている。そしてむしろ、そのような微細な違和感のほうが全面的な表象の解体よりはるかに戦慄的なリアリティを持っていることが明らかにされる。モダニズムには言語解体にいたるまで表現を追及するラディカリズムがあり、それが既成の美の概念と如何に背馳しようと、その追求自体に価値をおくという点で審美的といえる。これにたいして、日常ではなくむしろ日常以下のもの、文化ではなく文化以下のものに固執する（一方ではアンビバレントな強い情動を、他方では過度な無関心を顕わにする）ことで、ボウルズはモダニズムの価値をも相対化してしまう。「問題」としてのニヒリズムもモダニズムの審美主義もともに相対化してしまう、倒錯的なニヒリズムにして美学。それは微細な亀裂そのものに他ならない表象という現実を体験するという悪夢ではないか。

前稿で取り上げた「キティ」は、晩年の作品であるが、さりげない語りの希薄さのうちにそのような倒錯性をうかがわせるという意味で示唆的である。物語の概要は以下のごとくである。

ごく普通の家庭に育った普通の少女（というよりは幼女）である主人公キティは、自分の名前に固執する。母親になぜ自分の名前がキティなのか尋ね、本名キャサリンCatharineの愛称（縮小形）だ、と母親に説明されると、文字通り自分は将来猫になるのだ、と信じるようになり、鏡の前で変身を待ち受ける。ある朝望みどおり変身していることに気づいたキティは嬉々として家を飛び出し隣家で飼われることになる。時々家が恋しくなり家に戻っても、彼女の失踪を嘆き悲しむ両親は変身した彼女に気がついてくれない。やがて母親は悲しみのあまり入院したらしく変わり果てた家には彼女が恐れていた父親しかいなくなる。数ヵ月たって、退院して庭で休んでいた母親は、猫に変身したキティを拾い、家の中に連れて入る。両親は彼女がキティだとは気づかなかったが母親のひざの上でキティは幸せであった。彼女は動くときふわふわ見えるのでフェザーと名づけられた。こうして過剰に固有名に固執することでかえって自己同一性を喪失した（むしろ社会的な自我の萌芽を自ら放棄することになったというほ

うが正確かもしれないが) 彼女は他者への変身のうちにもはや帰還ともいえぬ帰還を果たすのである。

ここにはもはやモダニズムの過激な言語実験は見られない。物語内容が異形への変身譚であるにもかかわらず、拍子抜けするほど軽やかな語り口で語られ、ドラマティックな展開を期待する読者の期待は見事に裏切られる。しかし、これはけっしておとぎ話(メルヘン, fairy tale)ジャンルの語りではなく、むしろそうしたジャンルからの微細な違和=逸脱を喚起する。主人公キティに起こる変化は、異種の幼児への横滑りであって、決してこの年頃の子供に見られる成熟の兆候ではない。大人へと成熟すべき存在ではなくそれとは異種の存在としての子供。こうして通常の大人数の共同体として家族の価値が転倒し、倒錯的な幼児世界が実現されるのである。ここには、後で述べるように、大人=人間「以下」とみなされている「他者」の疎外のドラマが託されている。この「他者」の位置には、社会的アイデンティティをもたないさまざまな存在を代入することが可能だろう。これは現在のグローバルな状況の中で非対称な力関係において劣位にある存在たちのドラマでもあるのだ。

さらに、このテキストはアメリカ文学史というサブテキスト上、「猫」と「女性」という記号を介して、重要な先行テキストを持っている。すなわち、ボウルズが私淑してやまない作家エドガー・アラン・ポーの「黒猫」である。この点については前稿でも触れたが、重複を省みず若干補足しておくことにする。

家族における猫という存在は、純然たるペットでありながら放浪姓を持ち、有用性とは無縁、気まぐれにして誘惑的で、その過剰性によって家族の一員であるという特異な存在であるといえる。そこから神秘性、エロティシズム、女性、誘惑、攻撃誘発性、周辺性といった記号性が猫に託されることになる。そして何よりも、家族における猫の存在の過剰性は、ちょうど言語コミュニケーションにおいて虚構を誘惑的に語ることが持つ過剰性に比し得るといってよいだろう。

こうした猫の記号性は、古くから文学テキストにおいても最大限に活用されており、エドガー・アラン・ポー「黒猫」では上に述べた女性と猫の結びつきが、夫婦関係という家族の最小単位に内在する他者性の表象としてあらわれている。夫婦のコミュニケーションの崩壊を惹き起こし、妻殺しという事件を誘発するのは猫である。夫の語りをつうじて、もっとも身近な家族である妻の他者性と猫が重ね合わされるが、それは語り手である夫の、意識せざる欲望にほかならない。ポーは、先に述べた、猫が女性という他者の記号であるという共同体のコードを利用しているわけである。だからこの物語を享受するには、読者がこのコードをかりそめにも共有すること、つまり男性である語り手と共犯関係に結ぶことが前提なのである。猫が女性一般の他者性の記号であるわけでは決していない(特に女性にとっては)。このコードは従来の男性中心社会の表象システムの歴史的産物であるからだ。このかぎりでは、ポーに限らずすべての物語装置なるものは女

性読者を教育し、男性中心的な共同体のコードを強化することに加担することになるといえる。だが、ポーの物語では猫が勝利する。塗りこめられた壁から聞こえる猫の鳴き声は、夫の犯罪を露呈させ物語を終結させる。そこに近代的な（お望みならば白人男性中心的社会における）自我の、自己の内なる他者に対する敗北を見ることができるよう。同時に、物語を終結させる猫の鳴き声が語り手の語りを発動させている。語り手＝読者が誘惑されてきたのはこの語りという虚構の物語装置にほかならない。だが、語りが偏差を帯び、この、妻殺しの犯罪者を語り手とする犯罪小説の語りが、中流家庭の日常性に飽きた幼女の、猫への変身幻想を語る三人称のメルヘンの語りへと変化すると何が起ころののだろうか。家庭において大人「以前」の存在、すなわち性的にも未分化な幼女の抱く性幻想が中心化し、妻殺しという悲劇のかわりに、不可能な変身という倒錯的な喜劇が、現実との微細な違和感の増幅された幼児世界のうちに展開されることになるのではないか。

本章の小見出しとして掲げたテキストのミクロロギーとは、上記のようなバウルズのテキストを貫く微細な違和感やこうした語り＝偏りに「固執」する方法論的問題意識である。ミクロロギーというドイツ語の用語は、ドイツの哲学者T.アドルノが友人の哲学者W.ベンヤミンの企てを評して使った言葉である。アドルノの名著『否定の弁証法』の邦訳ではこれを「微物研究」（アドルノ27）と訳しているが、この言葉に対応する英語の micrology という語は「些事拘泥」とでも訳すのであろう、むしろネガティブな含意がある言葉である。

アドルノの研究者細見和之は、アドルノのこの用語に注目し、次のように述べている。

「形式としてのエッセイ」でアドルノは、エッセイは断片において考える、と述べている。現実が総体として把握されず、きれぎれの断片としてしか出会われない時代に、その破れ目を覆い隠すのではなく、その破れ目を通して考えること、それがエッセイ的思考の面目躍如とした点である。こういうエッセイというスタイルを通じてアドルノは、クラカウアーやベンヤミンのミクロロギーの視点を引き継ぎつつ、微細な部分に沈潜して大きな問を成り立たせている現実そのものを内側から破砕する方向を示唆せんとするのである。（細見82）

五
五

こうした方法論が一筋縄ではいかないバウルズのテキストに対する方法論態度として有効であろうことは、すでに今まで述べてきたことで明らかだろう。

英語の micrology の持ついささかの皮肉なニュアンスもこめてテキストに「些事拘泥」しつつ、問題の「アラール」を考えてみよう。物語はおおむね次のようなものである。

アラールは、町のはずれの高台の、ギリシア人が経営するホテルの使用人であ

る、十四歳の少女を母とする父親不明の私生児である。そのことで母は解雇され、同情した同僚の料理人夫婦宅で出産するがまもなく赤ん坊をおいて失踪してしまう。幼いアラールは頃その料理人夫婦のもとで働かされ、近くにある兵営から来る将校の給仕をしたりする。後に町に下りて土煉瓦を作る手伝いをして生計を立て、町外れの小さな小屋を借りて住むが、町の住民たちには忌み嫌われている。あるとき、アラールは、蛇を逃して町中から追われた蛇売りの老人を自分の小屋に泊める。彼は、老人の蛇の中でとりわけ美しい蛇をひそかにおびき出し手に入れる。麻薬で蛇をならしたアラールはある夜自らも麻薬を摂り、幻覚のうちに蛇と触合い、気がつくとも蛇と入れ替わっている。蛇に変身した彼は元の体を小屋に残したまま、町に向かう。しかし夜が明けると人通りが多くなったので、溝沿いに小屋に戻ろうとするが、小屋の前で子供に噛み付き、何人かの男に追われて、小屋の中に逃げ込む。元の体に戻ろうとするが、男たちは小屋に入って逃げようとするアラールの元の体を捕らえ、病院に送ってしまう。一方、蛇に変身したアラールは、棍棒や斧を携え改めて小屋にやってきた男たちの二人に噛み付くがもう一人の男が彼の頭を斧で切断する。

テキストを読んでいると、幾つかの謎が生じる。「些事拘泥」はそれらの謎に光を投ずる手掛かりになってくれるのではないか。

同種の変身譚の現代文学における古典ともいえるカフカの「変身」では、おどろおどろしい語り口ではないにせよ、冒頭から巨大な昆虫と化した主人公の姿とそれを平然と受け入れる隣人たちの姿が乾いた語り口で克明に描写され、読者に強烈な衝撃を与える。不条理な物語内容にふさわしい語りといえるだろう。このような現代の変身譚の典型に肩透かしを食わせるかのように、既に論じた後年の作品「キティ」のテキストでは、物語は、その内容が異形への変身譚であるにもかかわらず、ドラマティックな展開を期待する読者の期待を殺ぐかのように、それにふさわしからぬ、軽やかな、むしろ滑らかすぎる語り口で語られ、この物語内容と語りのこの落差こそ、「キティ」というテキストの謎の一つを構成するものであった。

語りと物語内容という点からすれば、この「アラール」という短篇は、キティと同じく三人称の語りで語られる。抑制されてはいるものの少年が蛇に変身するという変容の物語にふさわしい緊張感のある語り口で語られ、読者に名状しがたい恐怖を与える。その意味では、より典型的な「ホラー」に接近した語りだといえようし、アラブ世界という設定をはずせば、エドガー・アラン・ポー以来の正統派アメリカン・ゴシックの語りといってもよいかも知れない。すなわち、「キティ」と差異は、物語内容の違いに止まらず、語りの差異にも存すると考えられる。この差異は、謎のベクトルに新たな偏差を与えるのではないか。物語内容に即応した語りは、一見「ホラー」の語りの枠組みに従っているようにみえる。だが、それはキティにおけるのとは別の疑問を読者に提起す。誰がどこでこの三

人称の語りを語るのか。だが、それは単に語り手の問題ではない。むしろ語る主体が問題なのだ。三人称の語りの語り手として或る語りの中心を設定し、そこに実在の作者の声を代入することは容易であろう。語りは、偏り＝偏差によって組織されているのだから、三人称の語りといえども、あるいはそうであるがゆえに、一貫した語りの構造を析出できるという主張がなされるのが通例である。本稿でも作者の伝記的な記号性を考慮しつつある程度一貫した解釈を試みてみるつもりであるが、注意しなければならないのは、すでに述べたように、そうした実在の作者なるものがつねに既に、伝記的言説の効果に他ならないということである。

もう一つの問題にも、「キティ」が手掛かりを与えてくれるように思われる。それは題名の問題である。「キティ」と同じく、このテキストの題名には主人公の名前＝固有名が選ばれている。主人公キティの変身は、題名となっている彼女の名前自体が孕む二重性＝分裂に導かれて起こる。彼女の変身はキャサリンという固有名の放棄であり、社会的なアイデンティティを持たない存在であることの選択であるが、このような本来「重い」はずの疎外のドラマが、軽やかな語り口で語られることで、さりげなく羽毛を意味する普通名詞 feather が彼女の固有名になってしまう。言語は普通名詞あるいは代名詞のような置き換え可能な所謂転換語を主たる構成要素としているが、その普通名詞を固有名に変容させるということとは、言語を置き換え不可能な一回きりの事件に変えてしまうに等しい。この途方も無い不条理が、さり気ない語り口で達成され、通常の社会的価値系においては倒錯＝逸脱とみなされているものをいつの間にか承認させられていることに読者は気づくことになるのだ。この意味で、「キティ」とは、固有名の寓話の固有名なのだ。では、「アラ - ル」 Allal という固有名には、何が託されているのか。アラブ世界という場面設定からすれば、読者としては、この固有名がイスラム教の唯一神アラー Allah の御名とわずか一字違いの綴りであることを無視することの方が難しいのではないか。神の御名とのわずか一字のずれが主人公にどんな運命をもたらすのだろうか。

移行と変身

アラールの変身譚としての特徴を構成するに当たっては、まず手始めに物語冒頭の設定を詳しく読み直すことが有効かつ必要であろう。アラールの変身は移行の徴を帯びており、そのことがそこに集中的に読みとれるからである。その設定は以下のようなものである。

五
三

アラ - ルは、ギリシア人の経営するホテルの使用人である十四歳の少女が生んだ私生児である。母親は、彼の父親が誰であるか、そのギリシア人の経営者にどうしても言おうとしなかったため、解雇され里に返されそうになるが、同情した同僚の料理人夫婦に、産後の肥立ちがよくなるまで同居させてもらうが、まもなく赤ん坊をおいて失踪してしまう。アラールはその料理人夫婦のパティ

オで育ち、幼い頃から働かされ、料理場を手伝い、近くにある兵営から来る将校の給仕をしたりしている。孤独な彼の習慣は、兵営近くの高台から町のある低地を見下ろすことであったが、その町に降りていくと人々に「罪の子」と呼ばれ嘲られる。後には、その町で建材である土煉瓦を作る手伝いをして生計を立て、町外れの小さな小屋を借りて住むが、町の住民たちには「呪われた者」として忌み嫌われ、彼らに対して憎悪の念しか抱かなくなる。

実際彼は、物語冒頭から移行の表象の連鎖に囲まれて現われるといっても過言ではない。物語の全体は、イスラム教、蛇売りやキフやマジューンといった風俗、民俗習慣への言及からアラブ世界に場面設定されていることも容易にみてとれる。まず彼の育った場所からして、高台に位置するギリシア人の経営するホテルである。それ以外にそこにあるものといえば「兵営」the barracks (409) だけである。そしてそこからは「河や街」や「そのほかのあらゆるものものがある」「低地」を見下ろすことができる Everything else was below in the valley : the town, the gardens, and the river winding southward among the thousand of palm trees. (409)。

街を共同体の中心とすれば、その高台は周辺に位置し、共同体における境界領域であるばかりではない。そこに建つホテルは、共同体間を行き来する旅行者、ここを「通過する少数の自動車運転手」the few motorists who passed through the region (409) のような共同体の外部である漂泊民の一時の宿としての機能を果たす移行の空間に他ならない。

経営者がギリシア人であり、既にこの宿自体が他者性を帯びたことが示されている。このギリシャの記号性もとりわけ隣接する兵営の暗示するものとの関係で、看過することができない。ギリシア人の使用人としてアラールは、「兵営からホテルの食堂に来る将校たちの給仕を」する [he] served the officers from the barracks (409)。ここには、植民地支配のための軍隊の存在が暗示されているばかりでなく、その支配の力関係の構造が、記号的に配置されていることがみてとれる。周知のように西欧においては十九世以来、植民地主義政策の歴史的展開のなかで、ギリシアはオリエントとの境界でありイスラム世界の侵略の脅威に晒されているというだけでなく、西欧世界の起源として、文化的政治的に防衛されなければならない存在として神話化され、西欧列強の帝国主義的侵略の格好の口実となってきたことは、英文学におけるパイロンの例を見るまでもなく明らかなことだろう。

ドゥルーズ＝ガタリは、神話学者デュメジルの指摘に拠りつつ、移動するノマド的な存在を「戦争機械」として規定し、社会における武士（軍事）階級の原型とみなしているが、それによれば元来武士（軍事）階級は共同体防衛という点では共同体に帰属するものの、支配と祭祀をこととする僧侶（宗教）階級と同様、通常の共同体の成員のように生産活動にも従事せず、特殊な集団を形成していた（ドゥルーズ＝ガタリ407 - 478）。ここでは軍隊は、既に植民地主義の侵略性その

ものと化した戦争機械なのであり、宗主国から遠隔の地に在ってノマド的な記号性を帯びている。このようにホテルと兵営が建つこの高台という空間は、共同体が外部と隣接する境界空間であり、共同体を巡る支配の力学の暗示的な縮図なのだ。

そうした境界空間でアラールの変身＝移行は、いかなる意味を持つのであろうか。アラールが、後に共同体である街に降りていき、そこから不可避的に追放される位置に置かれ、呪われた「罪の子」として排斥されるのは、父無し子として密通という罪によって母に捨てられた子供だからというだけではない。かれはそもそも高台以来、最低の生活を送っており、生まれつきの疎外者といってよいだろう。それは、恐らくアラールが、給仕することになる兵営の将校の誰かを父親とする混血児であることをも暗示しているのではないか。既に述べた西欧とアラブ世界の歴史的関係におけるギリシャの記号性を考えれば、このホテルの経営者のギリシア人の、アラールの母親に対する態度はこのことをよく示している。彼は、「自分にも機会があったのにそれを利用しなかったことを思い出して」to reflect he himself had not taken advantage of the situation while he had had the chance (409) 腹を立てるのだが、宗主国の将校に先に手を出されては後の祭りである。混血性を暗示するのはこの将校との関係だけでは無く、後に彼が変身することになる蛇の色が、ほかの蛇たちの色と異なっていることにも窺われる。彼は、体内に支配国の血が流れているがゆえに「低地」の共同体の憎悪的になるばかりではなく、その出生の場所である「高台」の境界においても本質的に疎外された存在なのだ。こうしたアラールの変身は、強いられた移行であることをその特質としている。彼の変身は、本質的には自らの共同体との異質性を源泉とするアラールの想像力による行為にほかならず、正常な生活空間から異質な空間＝想像力空間への幻覚＝夢による移行であるといえる。疎外という強いられた生への移行に対する強いられた想像力による移行。これが、アラールの変身＝移行を特徴づけるものにほかならない。最後の場面で蛇と化したアラールは、小さな男の子と追跡してきた二人の男に噛みつくが、噛むという蛇の攻撃性は追い詰められた者の攻撃性なのである。

蛇神のイニシエーション

五 既に見たように、アラールの生い育ったホテルとは、異界との接触の場、内部と外部の接触点であり、旅人や僧など共同体外を存在を泊める役割を果たす境界的存在は、ちょうどアラブ人共同体におけるギリシア人経営者のように、それ自身異人の相貌を帯びている。こうした存在は、わが国においても例えば犬神伝説のような異類の存在を扱った民俗伝承の類に、共同体に異質なものを持ち込むと同時に共同体に排除されるものとしてあらわれている。アラールの変身譚とは、共同体のハズレモノの物語をこのような民俗学的想像力で、いわば蛇神神話として再構成したものと考えることができよう。

アラールは、街の外れに一人で住むようになってから、蛇を逃して町中から追われた蛇売りの老人を自分の小屋に泊めるが、このことが彼の生い育った宿屋というトボスの民俗学的機能の反復であることは容易にみてとれる。こうして迎え入れられた老人は、蛇という恐れられ嫌われている動物を、蛇使いの芸人に商って生計を立てていることから窺えるように、共同体の生産的な利益につながらない（蛇を逃した老人に街の人間が浴びせる罵倒の言葉は「この街じゃ蛇なんかいらねえんだよ」 We don't want snakes in this town. (410) である）、被差別的かつ危険な生業を営む存在である。アラールがこの老人に興味を持ち自分の小屋に案内するのは、明らかに自らと似た境遇でしかも年老いた老人に自分の未来の姿を見たからであろう。年と経験を重ねた老人と、人生の門口にいる若者。一見したところ典型的なイニシエーション＝成人式のようにおもわれるかもしれない。しかし、このイニシエーションは成人式としては、もはや予定調和的なものではあり得ない。イニシエーション自体が既に変容しているのである。そこで、その特異な構造を考察してみることにしよう。

成人式としてのイニシエーションは通常、人生＝生に必要な不可欠な秘密の知恵の伝達をその中核としている。そしてその知恵とは生を産み出す性にまつわる秘密の知識のかたちをとることがしばしばである。アラールのイニシエーションには濃厚に性の匂いがたちこめているが、実際それはイスラム世界にみられる厳しい戒律による性的抑圧の含意と無縁ではないだろう。このイニシエーションの著しい特異性は、手ほどきする者（イニシエーター）である蛇売りの老人がほとんど何も教えないことである。彼は、アラールに蛇の存在を教える。しかしそれは、アラールが彼の存在とともにそれに興味を示したからであって、結果的にそうなったにすぎない。では老人がたまたま教えることになった蛇の記号性とはなにか。続稿はその問題から論じ始めることにしたい。

(以下続稿)

* 使用テキストは“Alall” in Paul Bowles, *Collected Stories* 1939-1976. Santa Rosa : Black Sparrow Press, 1988. 引用の後の括弧内の頁数は原文の頁数を示す。なお文中のテキストの日本語訳の引用は志村正雄訳「アラール」(四方田犬彦監修「現代詩手帖特装版 ポール・ボウルズ」思潮社1990年所収)を使用した。引用の都合上、若干変更した部分があることをおことわりしておく。また、“Kitty”については“Kitty” in Paul Bowles, *Midnight Mass*. Santa Rosa : Black Sparrow Press, 1979 を使用した。

注

- (1) フレドリック・ジェイムソンが、その主著『政治的無意識』の第1章「解釈について」(ジェイムソン17-124)という、いわば彼の方法序説とも言うべき長大な章で提案している概念とかかわる。ここで、ジェイムソンはいわゆる「外的現実」という通念を批判的に再構築している。「外的現実」を実体化、物象化された「コンテクスト」と捉える従来の歴史批評に対して、ジェイムソンは、アルチュセールの「不在の

原因」，ラカンの「現実界」といった，表象不可能な「現実」概念を対置し，「サブテキスト」という概念を提出している。「歴史そのもの」は表象不可能だがテキスト化以外の「歴史」への接近も不可能である。そして「文学テキスト自体が，実はそれに先立って存在する歴史的，イデオロギー的《サブテキスト》を書き換えたもの，あるいは再構築したものであり」，「解釈」とは，「直接は現前しない」サブテキストを，「事後的に構築」することに他ならない。(ジェイムソン97)しかし，その作業は，テキストを書き換えることを通じて，すでにそのテキストが作り出し永続させているコンテクストの現実を変容させることによってのみ可能なのである(ジェイムソン98)。サブテキストとは，既存，新規を問わず，テキストの磁場に引き寄せられる，言説の盲点，亀裂，あるいは亀裂としての言説として存在するものといえるだろう。ジェイムソンによれば，「解釈」とは「解釈のアナーキー」の危険と「客観的実証性」の幻想の狭間にあって，双方のイデオロギー性を批判する方法論なのである。

- (2) この用語は『否定の弁証法』の序論のなかに9.「叙述」の項目に現れているが，ここにも注(1)で指摘したのと同様な緊張関係がみられる。アドルノによれば，この概念は，この項目に先行する項目の8.「思弁的契機」に対置されるべきであり，「的確性」によって「[観念論の]下部構造の権威主義的な権力要求を打破する」ために要請される(アドルノ27)。彼は，この点においてベンヤミンの試みを高く評価しつつ，同時に，その「非弁証法的実証性の残滓」を批判し，実証主義的な客観主義と，この概念との差異を浮き彫りにしている。

引用文献

- アドルノ，テオドール：『否定の弁証法』(木田元他訳)河出書房新社 1996年
 ジェイムソン，フレドリック：『政治的無意識』(大橋洋一他訳)平凡社 1989年
 田代 真：『猫と固有名詞 ポール・ボウルズ『キティ』』(日本マラマッド協会編『アメリカ短編小説を読み直す 女性・家族・エスニシティ』北星堂書店 1996年所収)
 ドゥルーズ，ジル+ガタリ，フェリックス：『千のプラトー』(宇野邦一他訳)河出書房新社 1994年
 細見和之：『アドルノ 非同一性の哲学』講談社 1996年
 モース，マリリン：『テキストの中の子ども - 自伝，虚構そして『止まることなく』における幻惑の美学』(山西治男訳，四方田犬彦監修『現代詩手帖特装版 ポール・ボウルズ』思潮社 1990年所収)
 四方田犬彦：『ポール・ボウルズ年譜』(四方田犬彦監修『現代詩手帖特装版 ポール・ボウルズ』思潮社 1990年所収)

(本学助教授・比較文学)